

戴潮春の乱における大甲の神佑

赤井孝史

はじめに

清代の台湾は、数度にわたる大規模な民衆叛乱を経験し、鎮圧には民間の武力が期待された。民衆自身が「防衛」戦に参加したのである。また漢人移民社会が、閩（福建）・粵（広東）などの祖籍を軸にしたグループに分かれていたため、生活権や経済利益を巡っての武力衝突を頻発させた。当該期の台湾は、「自力救済」の性格が強い社会だったのである。

清朝の軍事遠征における関帝の「顕聖」や、媽祖の助戦譚など戦争を幫助する神の姿には支配層による宗教権威の利用という点のみならず、民衆社会が持っていた切実な祈りの姿が見て取れるだろう。本稿では同治元（一八六二）年に発生した戴潮春の乱における大甲での神佑譚について、分析を行っていくこととする。戴潮春の乱に関する記録類には多くの神佑譚が残されており、民衆の視点で神佑が語られているものも少なくない。神佑譚とその周辺を検討することによって、民衆社会の様相が見えてくるはずである。

ことに大甲という街は、同治元（一八六二）年に彰化県の戴潮春が起こした叛乱（以下戴潮春の乱）において激戦が繰り広げられた地であり、ここでは一廟宇のみの神佑譚ではなく、多様なそれを伝えるという特色がある。こうした大甲における神佑譚の特色が何故生まれたのかを、個々の神佑譚の特色および乱当時の大甲の社会状況を中心に探っていくこととする。

分析に先立って、まず大甲という地域について、簡単に述べおきたい。大甲は台湾中西部の都市で、大甲溪と大安溪という二つの河川に挟まれている。もともとは大甲鎮と称したが、二〇一〇年に台中市と合併し、現在は台中市大甲区となっている。

大甲への漢人の入植は比較的早く、十七世紀半ばの鄭成功による屯田制を起源とするという伝承がある。しかし地域的な発展という観点から見れば、鄭氏政権滅亡後に開発が本格化する。鄭氏政権滅亡後に台湾を版図に組み入れた清朝は、雍正元（一七二三）年には統治組織を改変し、それまで諸羅県としていた地域を北から淡水庁、彰化県、嘉義県に三分割した。淡水と彰化の境とされたのが大甲溪である。大甲は淡水庁の南端とされ、彰化県との境界にあった。台湾島の開発および入植は南部が先じたため、清朝の統治に対する大規模反乱の多くは南部から拡大した。乾隆五十一（一七八六）年に発生した林爽文の乱をきっかけに大甲の軍事的位置は重要性を増し、嘉慶二十一（一八一六）年に巡検署が鹿港から移転して大甲巡検署となり、道光七（一八二七）年には中軍守備署が竹塹から移転しており、戴潮春の乱当時は淡彰境界の要地として守備

体制が整えられていた²⁾。本稿で扱う同治元年～同治二年の戴潮春の乱は上記のように彰化県から起った叛乱であり、大甲は叛乱勢力と淡水庁の鎮圧体制における、まさに最前線に位置したのである。

第一章 戴潮春の乱における大甲の神佑譚

第一節 国姓井の靈驗譚

戴潮春の乱における大甲の神佑は、具体的内容を伴う史料に基づけば三例挙げられる。時間軸に則って列挙すれば、第一は節婦余林氏（林春娘）による禱雨であり、第二は鎮瀾宮による託宣であり、第三に鉄砧山国姓井における神意である。これらの神佑をもたらしたのが、現在大甲三神と称される貞節媽、天后（媽祖）、国姓爺（鄭成功）であるという点は非常に興味深い。ただし第一と第二の神佑と第三の神佑では若干内容が異なる。第一、第二の神佑、即ち貞節媽と天后の神佑は、直接的に大甲を救う結果をもたらしたものと見えるが、第三の神佑、つまり国姓爺の神佑は敵将・林晟（林日成）の滅亡を暗示するという内容で、大甲にとっては間接的な神佑というべきものである。

そこで、時系列的には逆行するが、まず国姓爺の神佑を見ていきたい。

十八日、晟登鐵砧山。山上固有國姓井，相傳明末鄭成功嘗拔劍斫地，井泉湧出，劍尚埋井中。晟信之，乃祭而祝曰：「晟若得成大事，劍當浮出；若無成，即以一砲相加可也」。祭畢，進犯社尾莊，兵勇力拒之，晟中礮折兩齒，乃遁。其別股拒戰於田螺淤，俱敗回。鄉勇沿途邀擊，晟遂竄回四塊厝，不敢復窺大甲矣。³⁾

同治二（一八六二）年一月十八日、戴潮春軍の重鎮であった林晟（林日成）は、大甲街の北東にある鉄砧山に登った。鉄砧山山頂には、鄭成功がこの地に屯田することを決めた際に、良質の水が確保できないことから剣で湧出させたという伝説を持つ泉がある。

林晟の関心は大甲攻略ではなく、「晟若得成大事」か否か、つまり自身の野心の達成にあった。国姓爺が祈りを聞き届けるならば井の中から剣が浮き出すはずであり、聞き届けないならば砲撃に遭うはずであった。結果は神霊の導きがなく、石弓によって歯が折られ、滅亡が予告されたことになる。結果的には林晟がさらなる攻撃を断念したために大甲は事なきを得るが、この祈願の背景には鄭成功が反清を貫いた英雄であること、台湾を初めて開いた人物（開台聖王と称される）であることにある。上述のように大甲と鄭成功は関係があるが、大甲を神意によって守るという点からみれば、やや間接的な観が否めない。一方、戴潮春の乱終息という点では大きな意味を持つ神佑である。

第二節 節婦余林氏の禱雨

先述の通り、戴潮春は彰化県を本拠として反乱を起こした。大甲は淡水県に属し、彰化県との境界にあり、官軍側にとっては防衛上の重要拠点であった。

同治元（一八六一）年三月、戴潮春軍の王和尚と陳再添らは大甲に入城する。彼らの軍は二ヶ月に渡って大甲を占領し続けたが、五月、竹塹總局林占梅が勇首・蔡宇を民兵である「練勇」四百名とともに派遣すると、城内の勢力が呼応したため王和尚らは大甲城を失陥、城外に退去する。

しかし官軍側が少数だということを知ると、地理を熟知する王和尚らはすぐに態勢を立て直して大甲城を攻撃した。王和尚が採った戦術は後述するように大甲城の水道を遮断するというもので、城内は深刻な水不足に陥った。この時、城内にいた余林氏という女性がこの窮地を救うことになる。次の史料をみてみよう

初六日、糾眾來犯、水道斷絶。節婦余林氏禱雨、雨隨降。⁴⁾

五月六日、王和尚らは軍を再編して大甲に侵攻し、城内の水道を絶った。ところが余林氏という女性が禱雨を行ったところ、それによって雨が降ったというのである。別の史料をみてみよう。

初六日大會賊黨、將大甲水道塞斷。大甲城中素無水井、專恃溪水為食、百姓炊煙不舉。節婦余林氏年已六十餘、生平守苦節、當天叩首禱雨、以救萬民、甘霖遂降。練勇與民始安心固守、勝氣百倍、以為天助。⁵⁾

この史料も同様の内容を述べているが、大甲城内には元々井戸が無く、食事の用は専ら大甲溪や大安溪の水に依存していたという。従って水道を遮断されると炊事ができなかった。この史料では余林氏についての情報をえることができる。彼女は六十余の老女、平素から苦節を守っている人物であったとされる。この老女が天に向かってぬかずき、禱雨すると、恵みの雨が降ったというのである。

さらに重要なのは、この禱雨の成功によって、練勇と大甲の民衆が安心して防衛戦に当たったという点である。なお練勇とは官許によって編成された民間で編成された武力組織のことである。大甲居民とその守備兵は勝気も百倍し、この降雨を天助と考えた。事実、大甲城は粘り強く王和尚らの攻撃に抵抗し、同十三日には淡水同知・張世英らの来援を得て攻城軍の撃退に成功した。こうした事情によって、余林氏は単に雨乞に成功しただけではなく、大甲攻防における勝利の立役者と捉えられたのである。

余林氏の禱雨は計三回に及ぶ。二度目は同年五月である。一旦は大甲を退いた王和尚らは、味方を糾合して五月二十一日には再度大甲を包囲した。

二十一日、王和尚復糾偽掃北大元帥何守、合戴如川、江有仁、陳鯁、劉安、陳在、莊柳、蔡斷、蔡海、陳再添、陳梓生、陳狗母、劉阿魁、劉阿鹿、鍾阿桂、王蓋司、賴得六、揚大旗、陳得、吳仔華、李阿兩、廖安然、蔡通、趙慙、黃漢、林尚二十七營、共萬餘賊、復圍大甲。水道為賊所斷、城中絕汲數日。節婦余林氏復出禱雨、並齋戒禱天、願賊早退。時賊壓城而軍、居上風轟擊、幾不支。忽大雨反風、濠邊草屋失火、賊之據其中者皆驚潰。張世英登城擊鼓、羅冠英開門急擊破之、大甲圍解。⁶⁾

王和尚らは、大甲攻撃にまたしても水攻めの方策を採ったことがわかる。城内の水が失われた

時、余林氏が再び禱雨を行い、さらに齋戒して天に祈り、王和尚らの軍が速やかに撤退することを願った。この時まさに王和尚らの軍は城を制圧し、風上から砲撃したため、陥落同然の状態であった。しかし余林氏の禱雨によってたちまち大雨が降り、風向きが逆転し、壕端の草屋が失火したため、そこにいた攻撃軍は驚いて潰走した。この状況を受けて、張世英は督戦し、羅冠英城門を開いて追撃したため大甲の包囲を解くことに成功したのである。この時の余林氏は、単に降雨を願っただけではなく、敵軍の撃退も天に祈っている。

三度目は同年十一月二十六日のことである。十一月十日から戴潮春軍の攻撃を受けていた大甲は、二十六日に至って、つぎのような状況になる。

時水道屢斷，民皆飲溝水，垂罄，幸節婦林氏三出禱雨，雨降，士氣倍奮。⁷⁾

攻撃軍により水道がたびたび断たれ、民衆は溝水を飲んだが、それもまさに尽きようとした。幸いにも林氏が三度目の禱雨を行い、雨が降り士気も大いに奮ったというのである。

以上余林氏による三度の禱雨について見た。注目されるのは「練勇與民」が「始安心固守」したという記述や「士氣倍奮」などの戦意と関連付けて記述されている点である。外部から入城した練勇と、すでに城内に居住していた「民」との結束が難しかったこと、抵抗の意思に温度差があったことを伺わせる。余林氏の禱雨の意義は、繰り返される戦意高揚の記述から、天に届いた祈りとそれに伴う城内士気の高揚、そしてその結果としての戦勝という因果関係の中で理解され、重視されたことがわかる。

第二章 神佑の周辺

第一節 大甲「大姓」の戴潮春の乱への参加と乱後

ここでは乱当時の大甲の状況を、大甲の有力宗族を中心にみていきたい。まず注目するのは、戴潮春の乱における大甲攻防戦の状況である。

同治元年三月，大甲人王和尚聞秋曰觀失利，於是日假偽令，與陳再添、莊柳竄入大甲，住奸民王九螺家，勒派舖戶，誘脅良民，謀窺竹塹。守備洪某、巡檢吳某皆遁。然賊故等夷不相下，請戴逆遣一頭目。逆遣蔣馬泉至甲，百姓皆具香案迎接，而賊黨隨後者爭攫取案上器物。王、陳大姓倚賊勢以壓良民，民皆厭苦之，陰謀拒賊，懼九螺助逆，相顧不敢發。⁸⁾

この史料によれば、同治元年三月に大甲を占拠したのは、大甲人の王和尚である。王和尚は陳再添、莊柳とともに大甲に進入した。陳再添も莊柳も大甲人で「王、陳大姓倚賊勢以壓良民」つまり王姓と陳姓はともに大甲で有力な宗族で戴潮春側に属し、その勢いで大甲の人々を抑えつけていたというのである。大甲住民で「奸民」と称され、大甲の「良民」たちを脅し、戴潮春側に誘引した王九螺も王氏一族と見られる。しかしながら王和尚らも一枚岩とはいいい難く、互いに利権を争っていた。次の史料には、綻びの予兆が示されている。

大甲土豪王和尚聞彰城已破，率其黨莊柳、陳再添、王九螺等豎旗應賊。大甲城本有洪守備及吳巡檢，均先事遁去；賊愈橫，勒逼舖戶、苛派鄉民。惟賊首互爭利權，各不相服。戴逆遣蔣

馬泉來守大甲，蔣又以王和尚為耳目，王、陳諸姓恃勢逼脅，全無紀律；白晝通街公然劫掠，百姓苦之。五月，林占梅差蔡宇、陳緝熙偕張世英乘賊無備，於端午日率兵闖東門而入；賊大駭，逃奔回彰。王和尚知官兵僅數百人，糾集潰黨及其族人前來爭城。⁹⁾

この史料では王和尚は「土豪」とされ、莊柳、陳再添、といった党類を率いて大甲に迫り、王九螺は王和尚らに呼応したことが記されている。しかし王和尚らは大姓の連合であったために利権争いを起こし、規律を保てなかった。百姓を苦しめたために、林占梅ら官軍が来着すると、東門からの内応を許す結果となったというのである。

大甲が容易に、大姓の連合軍によって陥落した理由は、地域防衛を目的とした民兵組織である団練との関係がある。大甲には咸豊七年（一八五七年）に団練が設立されていたが¹⁰⁾、団練そのものは土豪や大姓に依存した地方武力組織だった。それゆえ、大甲街を含む竹南四保では団練設立に関連して、咸豊七年八月十四日に「保内」の「巨姓」たる王、陳、林、李、張、黄、郭、何、蔡、莊、曾の十一姓それぞれ一名の族長を挙げるように通達された¹¹⁾。同年十月十六日『淡新檔案』「竹南四保大甲街職員總理謝玉麟、義首王崑崗等為蒙諭舉充請給諭戳事」¹²⁾には、団練の設立と団練総局局長として蔡添進が選出されたことが記されているが、併せて大甲街および近隣各荘における各姓の族長名として王公平、陳三博、曾輪、李清珍、蔡記、林闊、張和、黄勅、莊助、郭升東、柯和ら十一名の名前が列挙されている。団練は大姓の私的武力に依拠するため、族長の筆頭に挙げられる王姓、陳姓が大甲において実質的に団練の中心的機能を握っていたと考えられる。

王・陳という「大姓」あるいは「土豪」と称される存在が戴潮春軍の一員であった以上、大甲の民間武力は機能不全に陥っていたと言ってよいだろう。大甲には大甲中軍守備とその配下二百名がいたが、「守備洪某、巡檢吳某皆遁」とあるように無抵抗のまま大甲から撤退したのであった。そのため、大甲には清朝側の部隊が派遣されることになる。先の史料でも見たとおり、官軍側の攻撃は大甲城内からの内応によって成功する。

五月，竹塹總局林占梅遣勇首蔡宇帶勇四百名，同歲貢生陳緝熙赴大甲。時值端午，東門小姓欲開城門通貿易，王、陳大姓持不可，相攻殺。適練勇驟至，合擊賊黨，大敗之，群賊皆退，遂復大甲。緝熙以和尚、再添皆平日習熟，招之即來。和尚偵官軍無多，不從。初六日，糾眾來犯，水道斷絕。節婦余林氏禱雨，雨隨降。練勇嬰城固守，與小姓同心拒賊。¹³⁾

竹塹（現在の新竹）の林占梅は、蔡宇に勇すなわち傭兵四百をつけて大甲救援に向かわせた。時は端午節であり、東門付近に居住する小姓らは通商のため城門を開くことを求め、このため大甲城内における王・陳と小宗族と抗争が勃発、その混乱に乗じて大甲は官軍によって陥落する。この後、官軍が少数であることを見抜き、旧知であった陳緝熙の投降勧告を拒否した王和尚らによる大甲水攻めが行われ、先述した節婦余林氏の第一回禱雨がある。禱雨を契機に蔡宇に率いられた傭兵と城内小姓は結束を深め、王和尚らの攻撃に抵抗したのである。

以上の経緯で明らかなのは、①大甲を守るべき守備が遁走し、竹塹の傭兵が大甲を奪還したということ、②大甲を危機に陥れたのは大甲人の土豪である王和尚らであること、③大甲では大姓

の王・陳が元から戴潮春勢力の一部であり、城内小姓たちはその圧力によって当初は戴側であったが、後に利害対立を起こして官軍を誘引したこと、である。この三点は相互に密接な関係がある。戴潮春の乱の四年前にあたる咸豊八（一八五八）年に大甲では漳泉粵分類械闘が起きている¹⁴⁾。王・陳の大姓と東門の小姓との対立は、この漳泉粵械闘の余韻によって引き起こされた可能性がある。このことから見ても大甲住民たちは、乱の以前から一枚岩ではなく、対立要素を含んでいたことがわかる。大姓の王・陳が戴潮春側であったため大勢は戴側に傾いていたが、それは時限爆弾を抱えているように危ういものであった。

一方大姓の内部でも多様な立場や行動があった。王和尚による大甲攻撃に際し重要な役割を果たした王九螺は、五月十一日の大甲攻防戦、即ち余林氏が二度目の袴雨を行って王和尚ら戴軍敗退の契機を作った戦闘において「城内奸民陳發與王九螺謀為内應，事露，官軍執發誅之，九螺夤縁得免。」¹⁵⁾即ち陳發とともに王和尚の攻撃に城内から内応したが、事が露見し、陳發は官軍に誅殺され、九螺は伝手を頼って免罪されたというのである。『戴案紀略』には「大甲城内王九螺，一方巨猾，屢為賊内應，與淡水王司馬通譜」¹⁶⁾と表現されている。城内から王和尚にたびたび内通しながら、一方で淡水の王司馬（淡水同知王禎）と同族として通譜するという行動をとっていた。伝手を頼るとは、王禎に同姓たることを以って、擬制的な血縁関係を結んでいたことを指していたのである。

王九螺は、咸豊七（一八五七）年に「義首」として団練設立に関わった王崑崗と同一人物である¹⁷⁾。王崑崗は戴潮春乱後も大甲街職員として活動している。公職にあったため、多くの伝手を得ることができたと考えられる。道光六（一八二六）年生まれの王崑崗は、咸豊七年の大甲団練設立時には三十一歳、戴潮春の乱発生当時は三十六歳である。壮年と言ってよいが、宗族の決定権を握っていたとは考えにくい。しかし大甲街職員でありながら、戴軍の王和尚に応じ、再び官に帰順した王崑崗は、乱後の王姓の発展と大甲の復興を担う人物として再起する。

乱後の王崑崗の活動を見ると、同治五（一八六六）年には大甲に義塾と義倉を設立するために尽力し、同治九（一八七〇）年には陳應清らと水神廟を建立している¹⁸⁾。乱後の大甲の復興に、王崑崗は無くてはならない存在であった。このうち、水神廟に注目してみよう。

水神廟 在大甲南城外。附祀戴逆之變各官紳、義民。同治九年，官紳捐建。業戶王崑岡獻充地基九坪九合。廟宇二坪二合。年徵香燈穀三十石。¹⁹⁾

上記史料でわかる通り、大甲南城外に建立された水神廟には、戴潮春の乱で戦死した義民や紳士を祀る意味も含まれていた。この水神は戴潮春の乱において「淡屬迤北獲無恙者，神之力居多」と、戴軍が越境と北進の阻止に靈験を顕したという²⁰⁾。なお廟地は、王姓の多く居住する大甲南門外で、王崑崗が廟地を提供し燈明料として年三十石が徴収された。しかし、『淡水廳志』にはさらに興味深い記述がある。

同治三年，抄封戴萬生案内在逃股首莊柳、莊領等田四段，年額徵租穀七十五石，撥充大甲水神祠香燈經費。²¹⁾

これによると、戴潮春について王和尚とともに大甲攻撃に参加した莊柳・莊領の財産であった

四段の田は「叛産」として官によって没収されており、その租七十五石を水神廟の燈明料として充てていることが記されている。戴潮春の乱の結果官に没収された田地（大甲抄封田）は「二十四甲八分六釐六毫六絲，年徵穀一百石變價銀八十四圓，另徵租銀六十九圓。」²²⁾である。莊柳ら叛産の租穀が銀に換算されていないため、換銀以前の年徵租と比較すると、それは全体の75%に当たる。しかし、王姓、陳姓は没収による経済的被害を比較的受けなかったように見える。つぎの史料を見てみよう。

莊門王氏有承祖父遺下水田，址在南埔後壁溪，前後租粟計共陸拾石正，因前年被官抄入大甲城門外水神廟爲香燈，春秋二祭，氏亦甘心，但氏自丈夫莊柳亡後，母子日食難度，室如懸磬，又唄兼煙如線，幾於欲斷，則目擊心傷，（中略）無奈向與承辦大甲司許乞哀，求憐憫其孤寡，勸現耕黃元舒從額外施恩，每年周急出粟陸石正，付氏收取（以下略）²³⁾

この史料は光緒八（一八八二）年のものである。これから、①莊門王氏が南埔後壁溪という地所に六十石の耕地を持っていたこと、②その土地は妻である王氏が祖父より伝領した水田であったこと、③この土地は官によって没収され、水神廟の燈明料、春秋二回の祭礼経費とされていたこと、④王氏は夫・莊柳没後に生活が困窮していたこと⑤大甲巡檢に年六石を王氏が收取できるよう求めていること、がわかる。

莊柳の妻王氏は、王崑崗や王和尚の縁者か同じ宗族内の女性だったと推測される。戴潮春への加担によって水神廟の経費とされた莊柳の水田は、元は王氏の水田であった。莊氏、王氏に関係する財産として官によるこの水田の没収は、むしろ当然といえた。一方、義民を境内に祀り、「靈驗」を顕した水神廟を建立することは、一旦は「逆賊」側に立った王崑崗にとって乱後における自身の立場を明確にする意味でも必要な行動だったと思われる。廟の経費とされた叛産は大甲巡檢の管掌するところであったが、廟の祭礼に関しては「春秋二祭、中元普度等項之用、向係王崑崗承辦」²⁴⁾というに実質的に祭祀の管理・運営に王姓が関与し、事実上権利の一部を維持していたと考えられる。それを踏まえると、莊門王氏が、王崑崗によって維持された王姓の影響力によって財産の一部を回復しようとする動きであるとも解釈できる。

戴軍から官軍へと転じた王崑崗は、乱後に多くの行政に関わり、財産も支出している。しかし王崑崗の存在があったからこそ、戴軍大甲攻撃の中心を成した王姓は没落を免れ、むしろ日本統治時代には大甲の富の過半が王姓に帰すほどの発展を見たといえる²⁵⁾。大甲における戴潮春の乱の戦後処理は、反乱に加担した王氏のような巨姓の存在を無視しては行い得ないというジレンマを抱えていたのである。

第二節 余林氏の貞節と大甲城内林氏

先述の史料では、大甲水攻め時における余林氏については六十歳を超えた女性ということ以外明確な記述がなかった。節婦と称される女性は、清朝によって顕彰された既婚女性を指す。その基準は夫との死別後二十年を経ていること、五十歳を超えていることと非常に高く、単に貞節を守ったというだけでは認められない²⁶⁾。しかし先の史料では、余林氏の具体的な「節」の内容が

明記されていない。そこで余林氏の人物像を探るために次の史料を見てみよう。

林春娘、淡水大甲中莊人。父光輝業農、為余榮長養媳。榮長年十七、赴鹿港經商、溺死。時舅沒姑在、無他子、哭之慟。春娘年十二、未成婚、願終身奉事、不他適；姑痛稍殺、進飲食。佐理中饋、早作夜息、奉命維謹。已而姑目疾、翳不能視。春娘以舌舐之、焚香虔禱、未半載而愈。顧復患拘攣、侍床蓐、躬洗濯、或徹夜不寐。姑勸之息、春娘從之、猶時起省視。姑顧而歎曰：『得婦如此、老身不憂無子也』。及卒、哀毀逾常。家貧、日事紡織、撫族子為嗣；旋沒、再立之。娶婦復沒、乃偕育幼孫、平居燕處、未嘗有疾言厲色、里黨之人靡不敬之。道光十三年、奉旨旌表。及戴潮春之役、同治元年夏五月初六日、王和尚糾眾攻大甲、斷水道、城人無所汲食、洵欲走。乃請春娘禱雨、雨隨降。眾大喜、嬰城固守。二十一日、和尚又合何守、戴如川、江有仁等來攻、眾可萬人、環圍數匝、水道復斷、城中絕汲數日。春娘復出禱雨。時和尚壓城而軍、居上風、轟擊幾不支。忽大雨反風、濠邊茅舍發火、眾驚潰。義勇開門出擊、破之圍始解。當是時、兩軍相爭、以大甲為扼要之地。淡北安危、繫於此城、故輒遭圍困、而守禦益堅。十一月、林日成以眾來攻、勢張甚、連戰旬日、水道屢斷。二十六日、春娘三出禱雨、雨降、士氣倍奮、圍復解。事平、城人禮之如神。三年卒、年八十有六。婦巫氏亦以節稱。²⁷⁾

長文のため、以下に大意を示す。余林氏は、大甲中莊（現在の大安中莊村）の人でもと林春娘といい、父は農業を営んでおり、余榮長の養い嫁とした。林姓であるが、嫁すことを前提に余姓の家に養女として入ったため、余林氏と言われたのである。しかし夫となるはずの余榮長は十七歳の時、商売のため鹿港に行った際に溺死した。その時舅はすでに没しており、姑が存命していたが、榮長の他に子供はなかった。

春娘はその時十二歳で、成婚していなかったが、終身姑に仕えることを願ひ、他の家に嫁がなかった。春娘は食事の切り盛りを助け、朝早くから働き、夜は休み、言いつけに従って謹みを保った。その後ほどなくして姑は眼病を患ひ、視野が遮られて視力を失った。春娘は舌で舐め、香を焚き敬虔に祈りをささげたところ、姑は半年を経ずして癒えた。手足のひきつりが起れば、寢床に付き添ひ、自ら洗い流し、徹夜して眠ることもなかった。姑が休むよう勧めるので、春娘はその勧めに従ったが、それでも時おり起きては姑の様子に気を配るという有様であったという。

余家は貧しく、春娘は毎日機織りをした。一族の子供を跡継ぎとして養育していたが、ほどなくして亡くなったため再び跡継ぎを立てた。その跡継ぎの娶った妻が死去したため、春娘は幼い孫をとともに育てた。その上平素から安らかに過ごし、疾言や令色などのない人物であったために土地の人々の尊敬を集めていた。道光十三（一八三三）年、朝廷にその「節」が奉られ、表彰された。そこに三度の禱雨が合ったため、大甲の人々は彼女を神の如く感謝したというのである。

女性の徳目には貞・節・孝がある。ただし節婦と言った場合には「貞」・「孝」の徳目は自ずから含まれている。夫の死後二十年の貞節を守り父母に尽くすには長寿でなければならないため、この年数に達していない場合には「貞婦」、「孝婦」も存在する。また夫に殉じて命を絶ったり、貞操を守るために自殺したりした場合には「烈婦」と称される²⁸⁾。

なお、余林氏（林春娘）の没年は同治三（一八六三）年、享年は八十六歳とされている。禱雨を行った同治元年には八十四歳ということになるが、伝説化した人物のため年齢は六十余から百以上まで記録によって様々である。寿命はその人物の善行に比例すると考えられたためであろう。

しかし本来、節婦であることとシャーマニズムは直接的な関係がない。余林氏は、禱雨によって婦巫と称されたが、戴潮春の乱における禱雨以外に巫女的な能力を見せたことは書かれていない。彼女が巫としての能力を有していたのであれば、そのような記録が（伝説的なものも含めて）残されるべきではないだろうか。つまり、同治元年以前の余林氏は、稀有な節を守り通した婦人であるというのみで、天に祈り神通力を発揮するような能力は認められなかったか、あるいは知られていなかったのである。

ではなぜ余林氏は禱雨を行うことになったのだろうか。まず考慮すべきなのは、現世に積んだ徳が天界で評価されるという天人感応の考え方である²⁹⁾。『戴案紀略』では「海外散人」の註として次のように述べる。「至余林氏之禱雨，而雨立降；官禱之不應、民禱之不應，獨氏禱之立應，是天之欲全大甲，即所以彰節婦之功也。」³⁰⁾ここには官と民がそれぞれ禱雨を行ったが、天はそれに応えなかったと述べる。また「是時百姓祈雨而雨不降，兵弁祈雨而雨不降，節婦禱雨而雨立降，是天欲存大甲並以顯節婦之苦節也。於呼奇矣。」³¹⁾と民＝百姓と兵＝官と置換している記述もあって興味深い。しかしいずれも祈禱に天が応えなかったことが述べられている。どちらも（余）林氏（節婦）の祈禱に対してのみ天が応えたのは天が大甲を助けようと欲したのであり、節婦の功あるいはその苦節が顕らかになったというのである。つまり天は、余林氏の貞節を称え、それによって「大甲の平和」をもたらしたということになる。

官と民が実際に祈雨を行ったのか、行ったとしてそれはどの程度の規模であったのかなどは定かではない。そもそも大甲の「官」である巡検や守備は早くから退去して不在であった。在地行政に関わる王崑崗は、一時戴軍に協力しており、祈禱を主催したとは思えない。援軍を派遣した林占梅、傭兵団を率いた蔡宇、張世英らは、彰化で発生した戴潮春勢力の反乱が、彰化から大甲を越え竹塹以北に広がることを恐れていた。その派兵は大甲の人々を救援するためというより、反乱軍の防衛線としての大甲を意識した結果といえる。

では民はどうであろう。『戴案紀略』ともに民と余林氏が区別されている点が注目される。つまり両史料ともに民＝余林氏以外の百姓には、天に届くだけの祈禱を行う資格がなかったという判断をしているのである。大甲攻防戦には王・陳といった大姓と小姓の利害対立が戦況に影響を与えた。民は状況次第で戴軍にも官軍にも靡きえたのである。民心を一つにしての禱雨が可能であったとは考えにくい。先述したとおり、林春娘の禱雨以降に、人心が一つになったと評されているのである。

加えて、民の立場から官軍に尽くす「義」という行為からは評価できない。戴潮春の乱のみならず、台湾で発生した内乱には民間武力が広く活用されたが、官の求めに応じて軍事奉仕した人々は義民と称される。朝廷に尽くした行為が「義」として顕彰されるのである。もちろん政治

的な意味を持つ顕彰ではあるが、一方で「義」は普遍性のある徳でもある。大甲の人々は、その置かれた状況ゆえ戴潮春に抵抗し、官軍側に「義」を尽くすという単純な構図にはあてはまらなかった。両勢力がしのぎを削る戦場の街としてはやむを得ない行動が、「義」から遠い行動を取っていたという判断と「民禱之不應」という結果につながったのだろう。

以上のように、戴軍の攻撃にさらされる大甲において、唯一天に祈り大甲を救うことができたのは道徳的善行を積んでいた余林氏、すなわち林春娘だけだったといえるのである。しかし、さらにもう一点指摘しておきたいのは、大甲林姓の存在である。上述したように林姓は、王姓や陳姓とともに「巨姓」の一つとして数えられている。現在、大甲には林姓の祖神である「林王爺」を祀った福興宮が旧大甲城北門付近にある。大甲北門一帯には林姓が多く、林姓の紐帯として光緒年間に建てられた廟が福興宮である。「林王爺」は同治二年、林日成（林晟）が大甲を攻撃した際に、北門付近に住む林姓を守護したという伝承がある³²⁾。そして林春娘（すなわち余林氏）が居住していた地も、北門付近とされている。

大甲南門付近は王姓が多く、「賊」とされた王和尚と官軍との間で動揺が激しかったことを考えればここで神佑があるとは考えにくい。東門付近は小姓が多く、大甲を救うほどの存在感を出すことは困難である。つまり北門の林姓以外、神佑を引き出す存在はなかったといってよい。林春娘が禱雨を行うことになったのは、もちろん彼女が節婦であったという事が大きな理由だろうが、林姓であったということも無関係だとは思われないのである。

第三章 大甲鎮瀾宮による神佑と嘉義・北港の神佑

第一節 鎮瀾宮の降乩

大甲には市外中心部には鎮瀾宮という廟がある。鎮瀾宮は乾隆三十五（一七七〇）年に創建された媽祖を祀る廟である。現在の大甲を有名にしているのは鎮瀾宮の媽祖信仰と言ってよい。媽祖誕辰の祭礼前に行われる彰化～新港への進香（媽祖の巡行）は、多くの参加者と見学者を集めることで知られている。

では、鎮瀾宮の神佑をみてみよう。戴潮春の乱において、鎮瀾宮はつぎのような靈驗を顕す。

二十六日、鎮瀾宮神降乩云：「今夜大難」，隨當空書符以壓之。是夜四更，賊潛至南門，暗藏火藥，火發，城垣大震，忽大雨（以下略）³³⁾

十一月二十六日、鎮瀾宮で神が乩童に降りて「今夜大難」という託宣を降す。乩童は童乩とも書き、神の憑依によって託宣するシャーマンのことを指す。その託宣通り、王和尚の一派が南門に潜み、火薬を使って放火したため大甲の城壁が激震したが、たちまち大雨となって（火は消された）というのである。

鎮瀾宮の主神は媽祖であるから、この童乩は媽祖の託宣を伝えたということになる。雨を降らせて火災を消火したという点でも媽祖との関連性を伺わせる。媽祖信仰の盛んな大甲であれば、鎮瀾宮が住民のために託宣を降して助けるという神佑譚はむしろ当然といえるが、この伝承には

不可解な点も残る。まずこの文章の続きを見てみよう

乃息、時水道屢斷、民皆飲溝水、垂罄、幸節婦林氏三出禱雨、雨降、士氣倍奮。³⁴⁾

この記述によれば、大雨によって放火の火はすぐに消されたのだが、それは大甲の住民たちを潤しはしなかったようだ。その時大甲は水攻めに遭い、住民は溝水を飲んで渴きを癒したが、それも尽きんとしていた。そこで件の節婦林氏（余林氏）が三度目の登場を果たし、禱雨すると降雨があったというのである。この文脈では、節婦林氏（余林氏）が鎮瀾宮で媽祖に祈って降雨をもたらしたと読めなくもない。しかし、前出の史料では「當天叩首禱雨」「禱天」とあって、媽祖とは記されていない。もちろん媽祖は「天后」であるので、「禱天」であっても矛盾はないのだが、それならばなぜ渴きに苦しむ民衆を前に一度は雨を止めてしまったのかという疑問も残る。

媽祖は元来航海の安全を守る女神であるが、祈雨にも靈驗のある事で知られる。降雨は農業に関係するため、この点に関しては媽祖の農耕神的な性格も指摘されている³⁵⁾。また鎮瀾宮の媽祖は礼拝に訪れると雨が降るというところから「雨媽」という別称を持っている。こうしたことから考えれば、水不足の危機に際しては鎮瀾宮で禱雨が行われて然るべきところである。しかしながら、官、民、そして林氏も『東瀛紀事』や『戴案紀略』には鎮瀾宮において禱雨を行ったという明確な記述がない。

もちろん禱雨に靈驗を顕すのは媽祖の専売特許ではない。例えば、嘉義縣の城隍神は「城隍尊神、禱雨祈晴、久昭靈應」³⁶⁾と称され、禱雨と祈晴に靈驗あらたかであるとされている。城隍神は都市の守護神であるが、場合によっては禱雨にも靈驗を顕すのである。こうした例からもわかるように、禱雨＝媽祖への祈りとして単純に理解すべきものではない。しかしながら天后＝媽祖へ禱雨がないというのは、やはり不自然だといわざるを得ない。もっとも、現在のように鎮瀾宮が台湾を代表するような媽祖宮となったのは、媽祖の生誕地である福建省湄州への参拝を果たした一九八七年以降であり、七〇年代以前は一地方廟にすぎなかったという³⁷⁾。清朝期の鎮瀾宮を過大評価はできないのかもしれないが、『東瀛紀事』はあたかも、これに続く林春娘の禱雨の予兆としてこの神佑譚を載せているようにさえ感じられるのである。

第二節 嘉義・北港の神佑

大甲の神佑を理解するために、同じく戴潮春の乱において靈驗を示した嘉義の城隍神と北港の天后の例を見ていくことにする。まずは嘉義の城隍神の例である。

同治元年彰化戴逆倡亂、圍撲嘉城、紳士等恭請神位於城樓、虔誠總禱、五月十一夜、地忽大震、雉堞傾1)而城垣無恙、兵民得以保全、咸稱神佑；九月間、戴逆復撲嘉城、眾心驚慌、告廟敬占休咎、蒙神默示平安、人心遂定、兵民竭力誓守、復保危城³⁸⁾

この史料によれば、戴潮春の乱当時、嘉義が包囲されると、紳士らが城楼において城隍神に恭しく願い、敬虔に祈りを捧げた。すると五月十一日の夜、城隍神は地震から城壁を守り、また九月に戴軍が再度襲来した際には、動揺した人々が城隍廟に吉凶を占うと、平安と默示した。その

ため人々は意を決し、兵民ともに防衛戦に力を合わせて城の危機を乗り切ったという。

紳士らが中心となって結束を固めたという点は、例えば『東瀛紀事』にも「於是紳士王朝輔、陳熙年等同至城隍廟，誓同心拒賊」³⁹⁾として見られる。この史料でも明確に城隍廟で同心して戦うことを誓約したと述べる。重要な点は、王朝輔、陳熙年といった紳士が中心となって城隍神の前で同心を誓うことによって人心をまとめ、決戦へと導いているということである。嘉義の人々にとって、戴軍は攻撃をしかけてくる「敵」であって、危機に際して神前で決戦を誓うことによって、城隍神の加護を引き出すことができたという因果関係で結ばれている。嘉義はこの結束によって、結果的に戴軍の侵攻に耐え抜くのである。

次の例は、北港の神佑である。

同治元年，戴萬生陷彰化，遂圍嘉義，遣股撲北港，港民議戰議避，莫衷一是；相率禱於天后，卜戰吉，議遂定。乃培土為壘，引溪為濠。事方集，賊大至，居民迎神旂出禦；賊不戰，退。時四月也。自是屢來窺伺，既不得逞，遂破新街，焚掠居民；港人集義勇出救，拔出被難男婦甚多，兼擒賊二人。詢以前此不戰之故，賊稱是日見黑旗下兵馬雲集，雄壯如神，故不敢戰；民始悟天后顯靈保護，共詣廟叩謝，守禦益力⁴⁰⁾

北港の天后宮（朝天宮）は、台湾でも最も有名な媽祖宮の一つである。それ故にこの神佑譚も広く知られている。戴軍が彰化を陥落させ、嘉義を包囲し、北港に迫ると住民たちは戦うか避難するかで議論となり結論が出なかった。そのため、天后（媽祖）に祈り神託を乞うたところ、「卜戰吉」という結果となったという。

ここで「議遂定」、つまり決戦に議論が決するのである。天后の託宣は、神託というよりも神判に近い意味を持っていたといえるだろう。しかし媽祖は戦いの方針を示しただけではない。北港住民たちが神旗を迎えて出撃すると、敵軍は戦わずして退却したのである。後に捕虜に聞いたところでは「黑旗下兵馬雲集，雄壯如神」という奇蹟を目撃していたのである。媽祖は神兵を下して助戦したのである。

北港の場合は、「港民議戰議避」と人々は二つの選択肢の間で結論が出なかった。この点で嘉義の例と異なるが、人心が一つになる契機として天后＝媽祖への信仰がある点と、媽祖が祈りに応えて助戦するという神佑をもたらした点はよく似ている。北港での媽祖が神兵を遣わすという絶大な神佑を与えたのは、「天后」という非常に高位な神であるという点から説明ができるだろう。

以上の二例では、祈りの主体たる街の住民たちの立場に大甲との違いが見られる。嘉義も北港も、基本的には戴潮春軍に抗するという点で他に選択肢はなく、問題となっているのは結束と抵抗の方法なのである。一方の大甲は、土豪たちが戴潮春勢力の構成員であり、従って大勢として、大甲はほぼ戴軍勢力圏内と言って良い状況であった。事実、同治元年三月の段階では、大甲は抵抗どころか無血占領されているのである。

しかし五月に入って、戴潮春側の王姓・陳姓とその他の宗族の間で軋轢が生じると、端午節という間隙を縫って官軍が入城し、攻守が逆転してしまう。大甲の住民は非常に複雑な状況に置か

れたと言って良い。こうした状況下では、嘉義のように住民の総意を神前で誓うことも、北港のように街の命運について神託を問うことも不可能だったといえる。祈りが無い以上、神佑があるはずもないのである。

さらに五月の戦いでは、王九螺（王崑崗）が王和尚と離れ、官軍に帰順するという事態が起る。戴潮春大甲攻撃軍は敗北したのみならず、重要な構成要素である王姓の分裂という状況に至った。大姓・土豪である王姓の分裂は、大甲城内外の政治的・軍事的バランスに大きな変化をもたらしたに違いない。この変化が、同年九月の鎮瀾宮による童乩を介しての託宣に結びついたと考えられる。大甲は反戴潮春勢力としてほぼ人心が一致し、鎮瀾宮の神託を受ける準備ができたのである。こうした状況の違いが、媽祖の助戦のあり方の違いに反映されているのではないだろうか。

おわりに

大甲の三つの神佑は、戴潮春の乱において大甲が置かれた境界地域としての性格が強く影響していた。官軍側から見て戴潮春勢力との境界にあたるのと同様に、戴潮春側から見ても官軍との境界に属していた。もっとも、乱の初期から王和尚らが参加していたことを考えれば、むしろ戴潮春勢力圏内だったと断言していいだろう。

戴潮春勢力に属す大宗族がありながら、大甲の人々は戴潮春勢力に攻撃されるという状況にさらされた。この矛盾した現象が、節婦林春娘の登場と禱雨の成功の称賛へとつながっていくのである。大甲における官軍側勝利の最大の貢献者にして、最もあらたかな神佑をもたらしたのは余林氏＝林春娘だといっている。

しかし人心が定まり、人々の結束が生まれると、街の中心にある鎮瀾宮も神佑を示し、戴軍北伐の障害となった大甲は、ついに台湾の開祖たる国姓爺の神意に触れることになるのである。時間の経過とともに、徐々に神々が神佑を示すのは予定調和的ではあるが、かかる神佑の発現の仕方こそが大甲の地理的・軍事的位置を如実に反映したものと見られるのである。そして、戴潮春の乱を契機として大甲三神が誕生する。

最後に、神佑と大甲における巨姓の力学について述べたい。王姓の存在はすでに述べたが、無視できない存在として林姓がある。戴潮春の乱において、大甲林姓は取り立てて注目する行動を取っているわけではない。しかし、林王爺の林姓守護伝承を持つこと、禱雨をもたらした貞節媽が林姓（林春娘）であったこと、そして託宣をくだして危機を伝えた鎮瀾宮を創建したのが林對丹という人物であったことは示唆的である。戴潮春の乱における神佑に、ほぼ林姓が関係しているのである。また現代のこのようではあるが、貞節媽＝林春娘を「大甲の媽祖」と称する例もあるという⁴¹⁾。貞節媽が媽祖と同じ林姓（媽祖は林默娘という実在の女性）であること、禱雨の力があつたことが鎮瀾宮の「雨媽」を連想させるためだと推察される。戴潮春の乱における大甲の神佑譚を考えるキーワードとして林姓の存在は注目に値する。

神佑譚は口承の形態で後代に記憶され、文字として記録に残るのはその一部である。大甲における神佑譚の語り手として林姓の人々を想定することも可能であろう。十九世紀の戴潮春の乱において決して突出した靈験を示したわけではない媽祖=天后は、現代の大甲では圧倒的な信仰を集める。媽祖と貞節媽を関連付ける社会心理を生んでいくプロセス、すなわち大甲の守護神的地位が媽祖に収斂されていく過程において、大甲林姓の歴史的意義は無視することはできないと考えられるのである。

註

- 1) 太田出「清朝のユーラシア世界統合と関聖帝君-軍事行動における靈異伝説の創出をめぐる-」歴史学研究会編『戦争と平和の中近世』青木書店 二〇〇一年、戴文鋒「臺灣媽祖『抱接砲彈』神蹟傳説試探 南大學報第三十九卷第二期人文與社會類 二〇〇五年
- 2) 廖瑞銘編著『大甲鎮志』台中市大甲鎮公所 二〇〇七年（以下『大甲鎮志』と略す。）
- 3) 臺灣文獻叢刊 八『東瀛紀事』卷上「大甲城守」（以下「大甲城守」と略す。なお基本的には國史館臺灣文獻館刊行のものを用いた。）
- 4) 「大甲城守」
- 5) 臺灣文獻叢刊 四七『戴施兩案紀略』『戴案紀略』卷上（以下『戴案紀略』と略す。）
- 6) 「大甲城守」
- 7) 「大甲城守」なお人心に関しては、「皆足以維繫人心而有關安危之數也」という注記もある。
- 8) 「大甲城守」
- 9) 『戴案紀略』
- 10) 國立臺灣大學圖書館所藏『淡新檔案』一二四〇二・一（以下『淡新檔案』一二四〇二・一のように記す。）
- 11) 『淡新檔案』一二四〇二・四
- 12) 『淡新檔案』一二四〇二・一〇
- 13) 「大甲城守」
- 14) 臺灣文獻叢刊 一五一『臺灣中部碑文集成 乙 示諭』『漳泉械鬥諭示碑』
- 15) 「大甲城守」
- 16) 『戴案紀略』
- 17) 『大甲鎮志』
- 18) 臺灣文獻叢刊 一五九『苗栗縣志 卷十五』文藝志「陳培桂 大甲溪水神廟碑記」
- 19) 臺灣文獻叢刊 六一『新竹縣志初稿 卷三』典禮志「祠祀 大甲堡廟宇」
- 20) 註 18) 参照。
- 21) 臺灣文獻叢刊 一七二『淡水廳志』卷六 志五 典禮志「祠廟」
- 22) 臺灣文獻叢刊 六一『新竹縣志初稿』卷二 賦役志「叛產」
- 23) 『淡新檔案』二二四三一・一五 E
- 24) 『淡新檔案』二二四三一・一五 C
- 25) 『大甲鎮志』
- 26) 陳青鳳「清朝の婦女旌表制度について：節婦・烈婦を中心に」九州大学東洋史論集十六 一九八八年
- 27) 臺灣文獻叢刊 一二八『臺灣通史』卷三十五 列傳七 貨殖列傳「余林氏」
- 28) 註 25) 参照。
- 29) 楠山春樹「道教と儒教」（福井康順他監修『道教 第二卷 道教の展開』平河出版 一九八三年
- 30) 臺灣文獻叢刊 二〇六『戴案紀略』同治元年
- 31) 『戴案紀略』

- 32) 『大甲鎮志』
- 33) 「大甲城守」
- 34) 「大甲城守」
- 35) 林美容『媽祖信仰與臺灣社會』博陽文化事業有限公司 二〇〇六年
- 36) 臺灣文獻叢刊 二九『福建臺灣奏摺』「請加封嘉義城隍神摺」
- 37) 三尾裕子「〈媽祖〉は誰にとっての神か？－グローバル化・ナショナリズム・ローカル化－」鈴木正崇編『東アジアの民衆文化と祝祭空間』慶應義塾大学東アジア研究所 二〇〇九年
- 38) 註 34) 参照。
- 39) 臺灣文獻叢刊 八『東瀛紀事』卷上「嘉義城守」
- 40) 臺灣文獻叢刊 三七『雲林縣采訪冊』大棟榔東堡 兵事 土寇
- 41) 大甲で採集した話である。また地元高級中学の副読本にも記述が見られる。なお媽祖は宋代の実在の人物で、林默娘という。

※本稿作成にあたり、元智大学大学院碩士課程の陳怡婷氏に現地調査を含めさまざまなご教示をたまわった。記して感謝したい。

[あかい たかし 歴史学]